



News Letter
No. 22
2006年11月1日

発行 レイバーネット日本
〒173-0036 東京都板橋区向原2-22-17-403
http://www.labornetjp.org
labor-staff@labornetjp.org
電話 03-3530-8590 FAX 03-3530-8578

レイバーフェスタ2006を一緒につくろう！

今年も12月に東京・大阪でレイバーフェスタを開催します。こんなひどい「格差社会」、そしてキナ臭い時代をあなたはどのように生きていきますか？映像や音楽を通じて「労働」「生活」を見つめ直す、このフェスタもますます充実してきました。目玉は、あなたがつくる3分ビデオです。

また大阪では替え歌ソングを募集中。さあ、一緒にフェスタをつくりましょう。

* 詳細は両ホームページをご覧ください。

〔東京〕12月17日(日) 10:00開演
東京ウィメンズプラザホール
映画「出草之歌」上映
・レイバーソングDJ
・「ヨッシーとジュゴンの家」・3分ビデオ等。
TEL : 03-3530-8590
http://festa.labornetjp.org/festa2006/index

〔大阪〕12月9日(土) 11:30開演
エルおおさか南館5Fホール
映画「ブレッド&ローズ」上映
・海外短編上映
・3分ビデオ・コント・レイバー替え歌ソング等。
TEL & FAX : 06-4805-0234
http://labour.blog71.fc2.com



3分ビデオ・
レイバー替え歌募集中



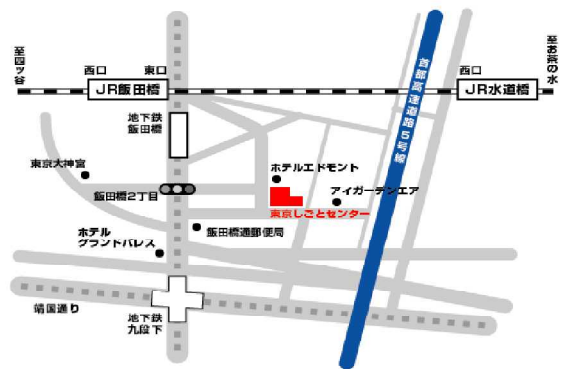
レイバーネット日本 11月例会のご案内

ワーキング・プアの現場から

市場原理・民営化のもとで出現した「新しい貧困層」の問題を考える

現場報告・・・首都圏青年ユニオン・
女性ユニオン東京・出版ネットの若者から
コメンテーター・・・石川源嗣(労働相談センター理事長・「ひとのために生きよう!」著者)
ビデオ上映「タケエイの闘い」
(労組結成の記録・15分)

日時：11月14日(火)午後6時半開演
会場：東京しごとセンター第一セミナー室
(JR飯田橋駅東口7分)
参加費 一般500円(会員無料)



危険な労働時間法制の見直しに反対しよう

社員を死ぬまでこき使う制度ができちゃうよ

林 游生（労働ジャーナリスト）

「残業という概念がなくなる」。労組幹部がそう嘆息する、労働時間法制の見直しが厚生労働省で進められている。1日8時間という労基法の規制を厳格に適用し残業を一掃するような見直しで残業という概念がなくなるのなら、歓迎すべき話なのだが、そうではない。労働者を労働時間規制から外す制度を作ろうとしているのだ。

制度は、「自律的労働時間制度＝日本版ホワイトカラー・イグゼンプション＝」と呼ばれ、労基法改正として労働契約法の制定などとともに、来年の通常国会への法案提出を目指している。制度は、管理職直前の社員や高い年収の専門職を対象に想定。適用された労働者は、「1日8時間労働」の労基法のルールからイグゼンプション（適用除外）され、仕事の繁閑に合わせて、自分で勤務時間を決められる仕組みだ。例えば、企画の作成で18時間勤務を3日続けて行い、企画完成後は2時間で勤務を終えるなどという働き方も可能になる。ただし、労働時間の規制が外れるため、8時間を超えて働こうが、「残業」という概念はなくなり、「残業代」も存在しなくなる。導入済みの米国では「残業代取り上げ制度」と揶揄させるゆえんだ。

対象労働者は、厚労省は一定以上の年収とし、1000万以上を想定している。また、製造業は対象外としている。ただし、制度導入を強く働きかけている日本経団連は、年収400万以上と低いハードルを設定している。400万となれば、正社員として働く労働者のほとんどは対象となってしまふ。「小さく産んで大きく育てる」とは厚労省幹部の言葉である。いったん制度ができてしまえば、年収要件などの引き下げはいとも簡単に行ってしまう。

さらに、制度は労働者の労働時間管理を行わないことを認めており、使用者は労働者が何時から何時まで働いたかを知らなくても良いことになる。これは、労働者の健康管理、安全衛生管理義務の投げ捨てだ。例えば、長時間労働で過労死したとしても、それを証明するのは極めて難しくなる。

使用者、厚労省は、「一層の自己実現や能力発揮」などと導入理由を言う。しかし、経営者からは「残業時間を気にするような働き方では国際競争に勝てない」と本音のぞく。つまり、この制度は、不払い残業、過労死問題などで企業が問われる責任をすべてなくするものだ。「正社員は死ぬまでこき使い、非正社員は生活ぎりぎりの低賃金で使う」赤裸々な使用者側の狙いが透けて見える。

（レイバーネット会員）

身近な世界をドラマに・・・君も3分ビデオをつくらないか

木下昌明（映画批評家）

なぜ3分ビデオなのか。3分といえば、ベトナム戦争の時代、カリフォルニア大学のパークレー校で、学生たちがパトカーの屋根にのぼって一人3分のフリースピーチを行なった運動があった。3分なら話がへたでも話せないことはないし、饒舌でも我慢して聴ける時間だし、それに多くの意見を楽しみ、参加意識を高めることができる。この方式をとりいれたのが、レイバーフェスタの3分ビデオ大会なのだ。と、わたしは勝手に考えている。

また、ビデオカメラも年々性能がよくなってきて、小さなことから地球規模での大変動まで撮ることができるようになった。これが大きい。山形国際ドキュメンタリー映画祭でも小型カメラでつくられた作品が多い。

今年のフェスタのメイン上映の井上修『出草之歌』だってほとんど一人でつくっている。正月公開の『ダーウィンの悪夢』のフーベルト・ザウパーも、「小さなソニー製ビデオカメラで撮りました。技術的な意味では撮ることは本当に簡単になってきました」と座談会で語っている。この映画は、グローバリゼーション下のアフリカがいかに悲惨な現実かを撮ったものである。

わたしも4年前に『娘の時間』という3分ビデオをつくったが、ビデオを撮る気になったのは、土屋豊の『新しい神様』をみたからだ。それもヒロインの



3分ビデオ「娘の時間」

雨宮処凛がカメラを鏡台がわりにして（自分に）語りかけているシーンのところ。カメラマンはいなくてもいい

のだ。そこで彼女は、自らを被写体として自己表現する楽しさを発見する。これがきっかけで右翼から左翼へと変身をはかる。それがカメラをとおしてみえてきた。小型ビデオは、従来の「映画」の発想をひっくり返す機能をもっている。そこでは撮影者が同時に主人公にもなり、身近な生活や労働現場がドラマの大舞台ともなる。そのことで小さな問題でも社会問題として訴えることが可能となるのだ！

まずは3分ビデオからはじめよう。さあ、ビデオカメラをもって街に出よう。

（レイバーネット運営委員）

レイバーネットの報道について (その2)

「やったら返す」運動メディアに

松原 明

「集会に来てほしい」「デモに参加を」・告知はすごく熱心。しかし終わったらそのまま、というケースが多い。これを「やりっぱなし」という。

国労闘争団の最古参活動家・佐久間忠夫さん(75歳)の名言のひとつが「やったら返す」である。「運動で大事なのは、やったら必ず返すこと。集会をやったら何人集まってどうだった、と報告する。カンパを集めたらこう使った、と報告する。返すことで、じゃ次は参加しようとか、次もカンパしようかとなり、広がっていく。運動なんてこれのくりかえしだ。まったく同感である。告知と報告はセットだが、じつは報告のほうが、運動をつくるという点ではとても大事なのだ。

「レイバーネットの報道って何なの? ジャーナリズム? 政党・労組の宣伝媒体? オルタナティブメディア?」- -最近、よく聞かれる。マスコミのように第三者的に客観報道する立場でないことは確かだ。かといって、特定の政治党派や労働組合に寄り添っているわけでもない。「労働運動をベースに社会を変えたい」という思いの人々がネットワークをつくり、生み出した「運動メディア」である。5年の実践のなかで自然とその報道スタイルがつくられてきた。それは「現場性・速報性・多様性」であるが、とくに「現場性」つまり「当事者が発信者である」ことに特徴があると思う。

たとえば、レイバーネットのトピック記事になっている「JR問題・トヨタ・共謀罪」の報道にしても、情報を発信しているのは、ほとんどが当事者かその支援者である。当事者はもっとも情報を持っている人だから、その情報には価値がある。昔は、当事者は「たたかう人」で、伝えるのが「マスコミ」だった。だから、マスコミから無視されると、その運動は世の中に知られることはなかった。しかし、いまは違う。インターネットのおかげで、当事者が「伝える」ことができる時代になった。レイバーネット

がやっている「メディア」とは、じつはこの「たたかう当事者の発信運動」なのだと思う。

安倍政権の登場、そして北朝鮮の核実験を契機に日本社会は「戦争できる国」に向かって地殻変動がはじまっている。格差社会の拡大・労働者の窮乏化が進んでいる。そして、民主主義の柱である憲法・教育基本法の危機。いまたたかわなくて、いつたかたうのか。必ず、労働者・民衆の運動が生まれてくるはず。「レイバーネット」はそうした時代に役立つメディアでありたいものだ。

(レイバーネット副代表)



お前ら、俺のおモチャ使うんじゃねえ

(イラスト:牛山 共)

戦後の世界の核実験 (新聞報道より)

1位	米国	1030回
2位	ロシア	715回
3位	フランス	210回
4位	英国	45回
4位	中国	45回
6位	インド	4回
7位	パキスタン	2回
合計		2051回

国民投票法案はワナだ!



(イラスト:広浜綾子)

レイバーネット日本の会員になりませんか

会員になれば、自分でニュースやイベント、お知らせを提供できます。レイバーネット日本は組合で個人で全国にアピールする絶好の場所です。

年会費 3,000円

郵便振替 00150-2-607244 レイバーネット日本

郵送宛先 〒173-0036 東京都板橋区向原2-22-17-403

レイバーネット日本事務局

入会申込用アドレス apply@labornet.jp.org

電話 03-3530-8590 ファクス 03-3530-8578



< 文化情報 >

映像ドキュメンタリー
『君が代不起立』11月完成へ



ビデオプレスの最新作『君が代不起立』(1時間20分)が11月に完成する。作品は、2003年10月の「日の丸・君が代」を強制する東京都教育委員会通達から、2006年秋の「勝

利判決」までを追っている。重い処分を受けてもたたかい続ける「教員たちのレジスタンス」を初めて映像化。完全自主作品につき、資金面での協力を呼びかけている。

予約価格 = 1本5千円(定価6千円のところ)
カンパ1口2千円
詳しくは <http://www.vpress.jp>



三井三池争議の現代的意義を探る

『ひだるか』

長編劇映画『ひだるか』が、全国上映中である。福岡の地方局の花形キャスター陽子(岡本美沙)が、父の謎の沈黙を契機に現在の三池を取材。そこで、見たものは……。各地の上映会で特に働く若い女性の大きな共感を得ているこの映画は、主演の岡本美沙が全編の音楽も担当。社会的なテーマに関わらず、芸術的感銘の深さでも注目を集めている。監督の港健二郎さんはレイバーネットの会員。

上映日程など <http://www.hidaruka.com>



フェスタ初公開の2作品

『労働者は奴隷か!』『すべて消える』

『労働者は奴隷か! ~住友大阪セメント残酷物語』(全日建連帯労組制作・撮影/編集=土屋トカチ・20分)首都圏で続く建設ラッシュ。セメントを運ぶ労働者もフル稼働だ。かれらの多くは、歩合給という違法な雇用関係の下にある。月に550時間働かされ、奴隷のような扱いに異議を唱え、職場でたった一人、労働組合に加入したAさん。彼を待っていたのは、自称・会社関係者による、暴力を使った労組脱退工作だった。

『すべて消える』(フランス作品・ジャン=マルク・ムトゥ監督・15分)はドキュメンタリータッチの短編劇映画。フランスの底辺ではたらく不安定労働者の現実をリアルに描いていて、世界の映画祭で話題になった作品。

『労働情報』創刊30周年記念

~労働映画イベント

07年2月に30周年を迎える『労働情報』は、労働映画イベントに力を入れている。

10・29団結まつりでは、韓国の鉄道女性労働者を描いた『塩』(ソグム)『日本鉄道員物語』『安保への怒り』『ジャーナターに正義を』を上映した。



< 新入会員紹介 >

共に闘わん! 攝津 正

(フリーター全般労働組合副執行委員長)

私はフリーター全般労働組合という小さな団体の副執行委員長をしているが、労働問題の最前線にいるわけではない。労働者・失業者大衆にとっていろいろと厳しい現状があるのは承知しているが、それにダイレクトに・真っ向から取り組むということはまだ出来ていない。だが、この度レイバーネットに入会させていただいたことをきっかけに、過重労働や低賃金の問題などに積極的に取り組もうと思っている。共に闘わん!

ウェブサイトの魅力感じた T・横山

レイバーネットの存在を知ったのは、私が加入しているMLの友人がレイバーネットの会員でもあり、彼が二重投稿をしたことがきっかけだ。とかく独善的になりがちな運動関係のサイトに、私はたいした期待を持っていなかった。だが、しかし.....。

今年の「反靖国」闘争は、アジア各国から参加した仲間とともに、連日連夜激しく展開された。家に帰って前記の投稿の件を思い出し、HPをのぞいてみた。そこにはつい先ほど私も参加し、終わったばかりのデモの写真がずらり並んでいた。この速さ、驚いた。私も写真撮影と報道文を書くことが好きだったので、刺激されて入会した。

あらゆる不正や理不尽、人権侵害を告発し、巨悪への怒りを共有しよう。「現場性・速報性・多様性」を堅持しつつ、一人ひとりが通信員として、大マスコミにはできない草の根の情報を、わけへだてなく伝えること。それが真に信頼される反権力メディアの条件だ。



< 編集後記 >

今年も会員が徐々に増え、現在287名。当初目標の300名にあと一歩だ。サイトへのアクセス数も年初が1日500だったのが、いまは1200になった。時代はまさに「激動期」。後悔しないためにいま行動を!(M)